

消尽と救済としての物語(4)

神谷 英二*

要旨 本稿は、「物語は消尽したものを救済できるか」を問う一連の研究の第4部である。まず、ブランシヨの「中性的なもの」の解釈において、パタイユの共同体論を批判的に継承した「不在の共同体」を理解することが不可欠であることを明らかにし、そのために「友愛」についても考察することにより、「私たちの間の異他性」こそが、ブランシヨの「友愛」であり、「不在の共同体」のエレメントであることが解明される。次に、「中性的な声」へと考察は向かい、そこで「唯一の法」が示される。その結果、「あらゆる物語は、中性的なものの召還のもとでは、すでに法外な場である」とのブランシヨの言葉が次に研究されるべき課題であることが明らかとなる。

キーワード ブランシヨ、中性的なもの、不在の共同体、友愛、中性的な声、法

1 はじめに：忘却を語る中性的な声を求めて

消尽からの物語による救済を探究している本研究にとって、「疲労の人」モーリス・ブランシヨ¹⁾が果たす役割は大きい。

これまでの研究によって、語らんとする人は、遠ざかりつつもその敷居に留まり、「歴史の天使」の眼差しをもって、まちを凝視することのみ、物語を語りうることを示された。敷居に留まって物語ることとそこで語られる言葉について、ブランシヨが多くのことを教えてくれるだろう。

ブランシヨは、『終わりなき対話』で次のように述べている。

「見ることはおそらく、語ることを忘れることだ。そして、語ることは汲み尽くしえぬものである忘却を言葉の底で汲むことだ。」その際、「われわれはどんな言語でもよいような言語を期待しているのではない。誤ちが語っている言語、すなわち迂回の言語を期待している。」(Blanchot 1969: 40)(cf. 松浦 1985: 262f.)²⁾

この言語は、際限なく迂回し続け、存在も文学そのものも疲れさせ、テロスへの到着を遅れさせる。ここには、触知可能なまでに物質化された疲労感がある。

また、『災厄のエクリチュール』ではブランシヨは、死と忘却について、次のように語っている。

* 福岡県立大学人間社会学部・教授

「書くこと、それは、つねにすでに過ぎ去った死をもはや未来には置かないことである。そうではなく、死を被ることを受け入れることである。死を現前させず、また自らを死へと現前させずに。死が経験されなかったにもかかわらず、起こったのだということを知ること、死が残す忘却のなかで死を認めることである。その忘却の消え去っていく痕跡は、宇宙的秩序から自らを外すように呼びかける。災厄が現実的なものを不可能にし、欲望を欲望されざるものにするところだ。

この不確かだつねに先行する死、現在なき過去の証し立ては、決して個人的なものではない。それが全体を逸脱するのと同様に。」(Blanchot 1980: 109)

また、デリダは、ブランショ論『滞留』で *Passion* を巡って、7本の軌線を語る3番目として、次のように述べている。

「法と他者とに対する他律的な関係におけるある種の受動性をも含意しています。この他律性は、単に受動的で自由や自律性と相容れないというものではないのですから、問題となっているのは、受動性と能動性との対立の手前にある、あるいはその対立を超えたパッションの受動性なのです。しかし、とりわけ思い浮かぶのは、レヴィナスとブランショがこの原-受動性について述べていることであり、特にブランショがレヴィナスとは異なり、中性的なものや、『語り声(voix narrative)』のある種の中性性を分析しているところです。『語り声』というのは、人称なき声であり、あの語り手の声(voix narratrice)というものをもたない声のことです。語り手の声の『私』は、それ自身として措定され、同定されるのですが。」(Derida 1998: 26f.)

受動性と能動性との対立の手前にある受動性としての中性性を帯びる非人称の声。しかし、声であるからには誰かに、何らかの共同体において語る声なのではないだろうか。しかし、何のために。

さあ、これらの言葉をきっかけに、「忘却を語る中性的な語り声」を問い尋ねる、迂回し続け、途方に暮れかねない旅が始まる。

2 中性的なもの、不在の共同体、友愛

まず、ブランショの思想的旅程における「中性的なもの」の登場について、クリストフ・ビダンによる優れた評伝の指摘を見よう。

「50年代の末から、とりわけ1959年の終わりの数か月にかけて、ブランショの批評的エクリチュールには新たに著しい変化が見られるようになる。〈中性的なもの〉が実詞化され、論考のエクリチュールは二つの声からなる対話や断章の並置という形をとり、近い者たちに捧げられたテキストの割合が大幅に増加し、註釈的な批評を放棄して哲学的エッセイの部類に属する言述——たとえ哲学の中断が問題になっていようと——へ向かう態度が、ますます際立ってくる。」(Bident 1998: 434)

ブランショの著述の中で、中性的なものが初めて明確に現れ、実詞化されたのは、雑誌 *La Nouvelle Nouvelle Revue Française* 1958年10月号(N° 70) pp.673-683に掲載された《L'étrange et l'étranger》においてである(Blanchot 2010: 278-288)。

そして、こうした興味深い変化と特徴が、単に評論活動に留まらず、政治、編集、文学に関わる彼の思考の運動全体に伴うことになってくる。「ブランショが1959年から1969年にかけて

書き、『終わりなき対話』(1969年)と『友愛』(1971年)に集められ、分配しなおされた論考を、年代に沿って読みなおしてみれば、生——この著者の生、文学の生、哲学の生、直接的にせよ間接的にせよ、政治的な、それらの共同体の可能性の生のことだ——の試練と焔に絶えず引き渡される思考の反復と強調の力を、おそらく他のどんな時期よりも際立たせることができる。」(Bident 1998: 434)

ここにある「共同体的可能性の生」は何気なく通りすぎてはいけな言葉だ。論述の迂回を恐れてはならない。この時期に、中性的なものが実詞化したことで、この「生」の試練と焔に絶えず引き渡される思考の反復と強調の力が他のどんな時期よりも際立ち、彼のその後の著述活動に深い影響を及ぼし続けるのだから。

「共同体的可能性の生」における可能性は、不可能性の可能性かもしれない。あるいは、レヴィナスの他者を持ち出すまでもなく、繋がる他者なき共同体かもしれない。

言うまでもなく、ここには、ジョルジュ・バタイユの言う「共同体をもたない者たちの共同体」が響いている。ブランショが『明かしえぬ共同体』の冒頭にも引用しているこの表現は、バタイユの1952年1月23日付のメモ書きの中にある。

「とりわけ共同体の不在について見直し、否定的共同体という考えを強調すること。共同体をもたない者たちの共同体」(Bataille 1973: 483)

ブランショは、『明かしえぬ共同体』で、バタイユの「否定的共同体」について、次のように述べている。

「ジョルジュ・バタイユは、10年以上ものあいだ、思考においても現実においても、共同体

の要請を実現するべく試みたのちに、またしても孤独へと立ち戻ったわけではなく(いずれにせよ孤独ではあるのだが、分け持たれた孤独のなかにおいてである)、不在の共同体に、いつでも共同体の不在へと変化しうる、そうした共同体に、身を晒したのである。」(Blanchot 1983: 12-13)

この不在の共同体は、バタイユの「神話の不在」という第2次大戦以後の世界についての認識から生じている。彼の力を尽くした神話の探究が完全な挫折に終わり、神話の可能性の終焉に自ら立ち会ったことの意識がここには投影されていると言ってよい(石川 2016: 175)。

神話なき世界の中で、すべてが灰となったかのような、詩を書くことも野蛮となったアウシュヴィッツ後の世界で(Adorno 2003: 30)、それでもブランショは、書物を共同体の紐帯として持ち出す。ただし、「誰に差し向けられるのでもない書物」であり、「匿名」ではあるが。

この点について、「誰に差し向けられるのでもない書物の匿名性は、未知なるものとの関係を通じて、ジョルジュ・バタイユが『否定的共同体、すなわち、共同体をもたない者たちの共同体』と(少なくとも一度は)呼ぶことになるものを打ち立てるのである」(Blanchot 1983: 45)と述べられている。

ブランショは、「私たちの間の異他性」を自分自身の友愛とする。『友愛』では次のように言われている。

「友愛、従属関係もエピソードも持たず、しかし、生の単純性の全体が入り込んでいるこの関係、それは共通の異他性の承認を経るのであり、この承認ゆえに私たちは友たちについて語るができず、ただ、友たちに語りかけることができるだけだ。」(Blanchot 1971: 328)

不在の共同体を理解するには、究極的には、私自身の自己同一性が消失した地点で作用する友愛というこの概念を受け入れる必要がある。「分かち合いもなく相互性もない友愛、跡を残さずに過ぎ去ったものへの友愛、未知なるものの非—現前への受動性による応答」(Blanchot 1980: 47)と述べられる。

ブランショがフーコーを追悼する書の最後に置いたアリストテレスのものとしてされる次の言葉に目を向けよう。

《O mes amis, il n'y a pas d'ami.》
(Blanchot 1986: 64)

友の現前と不在を同時に確言するこの一節は、過ぎ去った友へ語りかけ、非—現前への受動性による応答をしようとするブランショの友愛を最もよく示していると言える。

西山も指摘するように(西山 2003: 267)、ブランショは『文学空間』以来、エクリチュールと死が交差する、まさにその地点に文学を見出してきた。ハイデガーが言うように、自らの死は不可能性の可能性であり³⁾、死を経験するのは「非人称の私」である。ブランショは、作家の私という人称が、非人称へと変転する運動を非人称な死の空間への移行とみなす。これこそが文学であり、作家である私は「絶対的孤独」のうちにある。

「私たち自身がそうである未知のものを露呈させ、厳密に言って私たちが自分ひとりでは経験することのできない私たち自身の孤独との出会い(「私ひとりでは果ての果てまでは行くことはできない」)を顕現する、友愛とはそうしたものである。」(Blanchot 1983: 46)

私たちは、絶対的孤独の果てで、自らの人称を失いつつ、未知のものと他者と出会い、ここに友愛が生起するというのである。

こうして、不在の共同体と友愛についての素描を終えた。そこで、中性的な声は何であり、どこへ向かって語られるものなのかが、次の謎となる。

3 中性的な声と法

再び、ビダンの声を聴こう。

「1960年4月から1963年7月の間に、思いがけない不規則なリズムにのって、10の論考が対話形式で書かれる。それらが批評の言説を二重の声へと開き、註釈される作品を、ある関係によって保たれる隔たりのなかに置く。」(Bident 1998: 435)

この「ある関係」こそが、鍵だ。それから「二重の声」も無視できない。

その関係は、「対話を次々と展開させることによって聴取を増やし、応答を平坦に並置することで何も決めず、何も解釈しないように試み、かくしてその起源である中性的な声、その反復を差し出す中性的な声の咬きの輪郭を、遠くのほうに映し出すものだ。」(*ibid.*)

二重の声で対話しながらも、何も解釈しようとしてはならない。そして、中性的な声は、「ここ」になく、いつも「どこか遠くに」しか現れない。

対話と断章による、断片化されたエクリチュールによる批評形式において、彼の思考は、見えるものと見えないものの手前で、不可能なものからもぎ取ることがそれでもなお可能かもしれないものを、問いという形にまで至らないものを疑問点として掲げ、自ら問いかけを試みるのだ(Blanchot 1969: 620)。しかし、こうした迂回を重ねた、そもそも不可能かもしれない文学の営みに、救済の力能は、果たして

期待できるのだろうか。本研究は迷宮に迷い込んだのだろうか。

ビダンが描写するように、このようにして、ブランショは、崇高化や弁証法的な完成による救済が齎す、光に満ちたヴィジョンの「外で」、独自の思考のエクリチュールを産み出した。否、それは「産み出す」といった能動的な創造活動では決してない。おのれ自身を対象とする語りによって生きられる経験をしつつ、作品と作品の名のない部分に、疲弊しつつ、その不可視の中性性に、「災厄のエクリチュール」を差し出す。それは、救済とは無縁に思われる文学活動だ。しかし、それでも彼は、中性的なものを「不可視のパートナー」と呼ぶのだ(Blanchot 1969: 497note)。

こうした光景をブランショの『終わりなき対話』の冒頭に置かれた、断片化された物語「終わりなき対話」の中で、具体的に見てみよう。

「彼が部屋のなかに入るたびに、そして、どうぞ、と言い、立ち上がって扉を開いてくれる、がっしりとした体つきの、ていねいな、もうかなり年をとった男の姿を認めるとき、彼が感じるのは、対話はずっと前から始まっているということである。

すこしあとで、こんどのこの対話が最後のものになるだろうと彼は悟る。彼らの交わす言葉から放たれる一種の好意めいたものは、そういう理解ゆえだ。『これまで私たちはいつでも好意的ではなかったのでしょうか。』——『いつでも。けれど、より完璧な好意、まだ私たちの知らない好意、そんな好意を証し立てることが私たちに求められなければならない。私たち個人だけに限って向けられることはできないような好意を。』——『かといって、万人に拡げられて満足するものでもない好意、むしろ、好意的

な態度に出るのはふさわしくないような出来事に向かって、好意的な姿勢をつづけるような好意を。』『そういう出来事をこそ、今日、私たちは喚起しようと心に決めたのです。』(Blanchot 1969: VIII)

二人の男が、同じ部屋で対話の意思をもって、出会う。それどころか、一方は他方から招かれ、歓待されているかのようですらある。二人はこれまでも幾度も対話を続けてきたようだ。そして、これが「最後の対話」になると、片方は確認している。しかし、ここには、「是認」や「同意」があるのだろうか。

「いつものように、二人のうちの一人が、残る一人から、自分の言葉に対する是認を待っているが、実はそれは訪れない。二人のあいだの一致が欠けているからではなく、それが前もって与えられてあったからだ。そのことが彼らの対話の条件をなしている。」(ibid.)

つまり、是認は待っているが、与えられない。二人の間的一致は不可視だが、どうも何かの一致はあるようなのだ。

「おまえは本当に、疲労によって中性的なものに、そしてまた、中性的なものによって疲労に接近できると、生起することをよりよく理解できると信じているのか。語ることは見ることではないというのに。実は、私はそれを信じてはいない、それを主張もしない、そのためには私は疲れすぎている。ただ、私の知らない誰かが私のそばでそう言うだけだ。私はそいつに言わせておく。それは別に不都合なことのない眩きだ。」(Blanchot 1969: XX II)

二人はともに疲れている。しかし、この共通する疲労は二人を近づけることなく、終わりなき対話に、迂回する対話に入っていく。しかし、「私の知らない誰かが私のそばでそう言うだけ

だ」とはいかなる状態だろうか。ここにいない遠くの他者の如く、どちらかが呟いているのだ。

「中性的なもの、なんとそれは私にとって奇妙に響くことか。」(Blanchot 1969: XX II)

こう言いながら、二人はともに中性的な声で語り続ける。

「ある持続的なやり方で、しかるべく自己を表現すること、そういう能力を、彼は失ってしまったのだ。力をつくして自己同一性と統一性を求めている理性の時間にほかならない、あの非時間的な＝永遠不変の時間の連鎖によって、論理的な言述の一貫性という欲求を充たそうと願うのであれ、あるいはまた、書くという作業の途絶えざる動きに従うのであれ、しかるべく自己表現する能力を。このことは彼を幸福にはしない。とはいえ、ときおりその埋め合わせとして、彼は、自分が間歇的に自己を表現する能力を、いやさらには、間歇性そのものに発言させる能力を獲得したように思う。このこともまた、彼を幸福にはしない。

このことは彼を幸福にも不幸にもしないが、幸福になりうるひとつの主体、不幸を課せられるべきひとつの主体との関係いっさいから、彼を切りはなすように思われる。」(Blanchot 1969: XXII-XXIII)

もはや自己表現する主体ではない彼がここにはいる。この彼とは、二人の男双方であろう。「間歇的に自己を表現する能力」によって、中性的な声で辛うじて発話しているようだ。しかし、それも彼自分が表現するのではなく、間歇性そのものが発言するようになっていくという。

それならば、いっそのこと主体であることを完全に放棄し、「彼に関係しない何かとともに

生きること」(Blanchot 1969: XX III)を考えればよいのではないか。もはや「彼は彼ではない」のだから。しかし、「この」対話は中断される。そして、奇妙なことに、この二人の間で、「唯一の法」が語られ始める。

「おまえはじつによく知っている。唯一の法は——他に法などありはしない——、一人ひとりの人間が、切り離されていようと他人たちに結びつけられていようと、言葉を話そうと黙していようと、ある種の合意＝一致によって受け入れ、担い、保ち続ける、あの無比の、連続した、普遍的なディスクールのなかにあるのだということ。」「いかなる決定にも先行する内的な合意、言い換えるなら、ディスクールの意志そのものによって、つねに促進され、あるいはまた望まれて、そんな合意を拒否しようとするあらゆる試みが、かえってそれを確認してしまうような合意——ちょうどあらゆる侵害がその合意をかえってより確実にし、あらゆる停止がその合意をかえって持続させるのと同じように——、そんな合意によって一人ひとりの者が受け入れ、担い、保ち続ける、あのディスクールのなかにあるのだということ。——私はそのことを知っている。——つまりおまえは知っているのだ。言葉がそのあいだ途絶えるような、あれらの中断についておまえが話すとき、おまえはそれらの中断について語るのであり、そうすることで、それらの中断を、ただちに、いやただちにどころか、前もって、あのディスクールの力、途絶えることのない力へと復元しているのだということ。——そうした中断が生み出されるとき、私は口を閉ざす。——もし仮に、おまえが一度は口を閉ざさねばならないようなやり方で、そうした中断が生み出されたのだとすれば、おまえはもうけっしてそれについて語

ることができないだろうに。——だからまさに、私はそれについて語らない。——それなら、おまえはいま何をしているのだ？——私はそれについて語らないと言っている。」(Blanchot 1969: XXIV-XXV)

ここに、カフカの描くあの門番の如き、法の番人が登場する。

「私はこうした一切を知っている、おまえよりずっとよくそれを知っている。というのも、もし私がこの言葉の推定上の番人、この言葉により指定され、生じさせられた番人なら、おまえは、この番人の番人、この番人に指定され、生じさせられた番人にすぎないのだから。」(Blanchot 1969: XXV)

しかし、「一人ひとり人間が、切り離されていようと他人たちに結びつけられていようと、言葉と話そうと黙していようと、ある種の合意＝一致によって受け入れ、担い、保ち続ける、あの無比の、連続した、普遍的なディスクールのなかにあるのだ」と言い、この法に遵い、この二人の番人の言う通りに待ち続ければ、物語をいっさい語ることなく、彼は死を迎えることになる。なぜなら、対話はすでに何度も中断しているのだから。

「今は入門を許可するわけにはいかない」という門番の言葉に従って、門が開いていようと、2番目3番目の門番に怯えて、そこに立ち尽くし続け、死を迎えた田舎者と同じ結末を迎えるのだ。しかし、さらにここでは二人は門前に待つ田舎者でもあり、門番でもあるという二重性を帯びている。それでは、この法は一体どこからやってきたのだろうか。なぜ二人は法の番人になっているのだろうか。

そして実際に、「真実を一生休むことなく追求してきたけれども、いざその真実が姿を現わ

す日になると、私たちはどうしてもそれを捉えそこなってしまう、まさしく私たちがあまりに疲労しすぎているために——まるで、そんな真実の形態そのものを、疲労は私たちに提示してみせてくれるにちがいないとでもいうようですね。」(Blanchot 1969: V)と一人の男が言うのだ。これはゴドーを待ち続ける、あの二人の境遇以上に、希望も救済も望めない事態ではないのか。

しかし、ブランショはさも当然であるかのように、「あらゆる物語は、中性的なものの召還(citation)のもとでは、すでに法外な場である」(Blanchot 1969: 568)と言うのだ。

これは、なぜなのか。

わたくしも、ブランショに倣い(Blanchot 1969: 620)、自らに問いかけを試みよう。問いかけにまで達しえないかもしれない問いを。迂回と遅延を強いられるだろう問いを。

(「消尽と救済としての物語(5)」へ続く。)

註

- 1) ブランショは『私についてこなかった者』で、疲労に関わって次のように書いている。「私は自分がほとんど疲れてはいないが、途方に暮れ、異常なほど何もせずにいると感じていた。この無為は私の仕事でもあって、私を働かせた。」(Blanchot 1953: 70)
- 2) 忘却と迂回について、ブランショは『終わりなき対話』「忘却、非理性」の冒頭で次のように語る。

「忘却、すなわち、現前ならざるもの、不在ならざるもの。

隠れたものとの調和として忘却を受け入れること。忘却とは、忘れられる個々の出来事においては、忘却の出来事のことである。あるひとつの語を忘却することは、あらゆる言葉が忘却されるという可能性

に遭遇することであり、忘却されたものとしてのあらゆる言葉の傍らに在ること、そしてまた、言葉としての忘却の傍らに在ることである。忘却は、忘却された語のまわりに言語を取り集め、その総体へと高める。

忘却のなかには私たちを迂回するものがあり、忘却から到来する迂回がある。言葉の迂回と忘却の迂回との関係。この関係から導き出されるのは、言葉は、たとえ忘却された事象を言い表わしているとしても、忘却に背くことなく、忘却のために語っているということである。」(Blanchot 1969: 289)

3) 死の不可能性について、デリダは『境域』で次のように述べている。

「死ぬことの不可能性が最もはっきりと思考の生き生きとした関心を引いているテキストの一つは、たとえば範例的に『災厄のエクリチュール』に見出されるだろう。この著作は絶えず火と光への問いによって、そしてそれ以上に「ホロコーストの消尽」によって貫かれ、鍛えられている。災厄という語は、それ自体天からの暗く、白い光によって照らし出され、燃え上がっているのが見られる。そのすぐ初めのところでブランショはこう言っている。「災厄という語が、星と分離されていること（高きところにおける偶然との関係性が絶たれたときの、狂気の印された凋落）を意味するならば、それは破局的必然性のもとへの落下を意味している。」(91)あるいはまた「夜、白い夜、——災厄とはそういうことだ。闇が欠けているのだが、光が照らしているのでもないそういう夜。」(8)あるいはまた「その暗い色彩を強めつつ——弱めなければならない災厄は、我々をある受動性へと露出させる。我々は災厄に対して受動的なのだが、しかしたぶん災厄が受動性なのであり、そのことにおいて、過ぎ去ったもの、常に過ぎ去ってしまっているものなのだ」。(13)

もう少し先のところでは、その結果 ——と私は言

いたいのだが——、その「常に過ぎ去ってしまっている」ことからの帰結として、彼はまた、疑問符をつけて、「死後の災厄？」と言ひ、そしてとりわけ「静寂、ホロコーストの消尽、正午の殺戮 ——災厄の静寂」(15)と言っている。」(Derrida 2003: 288-289)

引用中の頁はすべて(Blanchot 1980)からのものである。

参考文献

- Adorno, Theodor W.(2003): *Prismen, Kulturkritik und Gesellschaft*, Gesammelte Schriften in zwanzig Bänden. Bd. 10. Suhrkamp.
- Bataille, Georges(1947): *L'absence de mythe*, dans (1988): *Œuvres complètes*, t. XI, Gallimard.
- (1952): *Notes*, dans (1973): *Œuvres complètes* t. V, Gallimard.
- Beckett, Samuel (1952): *En attendant Godot*, Les Éditions de Minuit.
- Beckett, Samuel et Deleuze, Gilles (1992): *Quad; et, Trio du fantôme;...que nuages...; Nacht und Träume. Suivi de L'épuisé*, Les Éditions de Minuit.
- Bident, Christophe(2008): *Maurice Blanchot : Partenaire invisible*, Champ Vallon.
- Blanchot, Maurice(1942): *Aminadab*, Gallimard.
- (1943): *Faux pas*, Gallimard.
- (1949): *La part du feu*, Gallimard.
- (1951): *Au moment voulu*, Gallimard.
- (1953): *Celui qui ne m'accompagnait pas*, Gallimard.
- (1955): *L'espace littéraire*, Gallimard.
- (1957): *Le dernier homme*, Gallimard.
- (1959): *Le livre à venir*, Gallimard.
- (1962): *L'attente l'oubli*, Gallimard.
- (1969): *L'entretien infini*, Gallimard.
- (1971): *L'amitié*, Gallimard.

- (1980): *L'écriture du désastre*, Gallimard. 『フランス語フランス文学研究』(109)、173-186.
- (1981): *De Kafka à Kafka*, Gallimard. 上田和彦 (2005) : 『レヴィナスとブランショ：〈他者〉を揺るがす中性的なもの』水声社
- (1983): *La communauté inavouable*, Les Éditions de Minuit. 郷原佳以 (2011) : 『文学のミニマル・イメージ：モーリス・ブランショ論』左右社
- (1986): *Michel Foucault tel que je l'imagine*, Fata Morgana. デリダ、ジャック (1986) : 『カフカ論—「旋の門前」をめぐる』朝日出版社
- (1994): *L'instant de ma mort*, Fata Morgana. 西山雄二 (2003) : 「未知なる者への相互性なき友愛：モーリス・ブランショの一九六〇年前後の交友関係について」『一橋論叢』130(3)、258-274.
- (2005): *Thomas l'Obscur*, Première version, 1941, Gallimard. — (2007) : 『異議申し立てとしての文学：モーリス・ブランショにおける孤独、友愛、共同性』御茶の水書房
- (2008): *Écrits politiques 1953-1993*, Gallimard. 平野嘉彦 (2015) : 『土地の名前、どこにもない場所としての：ツェラーンのアウシュヴィッツ、ベルリン、ウクライナ』法政大学出版局
- (2010): *La condition critique: Articles, 1945-1998*, Gallimard. 松浦寿輝 (1985) : 『口唇論：記号と官能のトポス』青土社
- Derrida, Jacques, et al. (1985): *La faculté de juger*, Les Éditions de Minuit. 守中高明 (2004) : 『存在と灰：ツェラン、そしてデリダ以後』人文書院
- Derrida, Jacques (1974): *Glas*, Galilée. — (2012) : 『終わりなきパッション：デリダ、ブランショ、ドゥルーズ』未来社
- (1986): *Schibboleth: pour Paul Celan*, Galilée. * 本論文は、日本学術振興会・令和2年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)・基盤研究(C)(一般)、研究課題名：モダニズム詩に現れる形象を導きとする集合的記憶に基づく「まちの物語」の哲学的研究(研究代表者：神谷英二、課題番号：19K00037)による研究成果の一部である。
- (1987): *Feu la cendre*, Des femmes.
- (1994): *Politiques de l'amitié*, Galilée.
- (1996): *Apories*, Galilée.
- (1998): *Demeure: Maurice Blanchot*, Galilée.
- (2003): *Parages*, Galilée.
- Foucault, Michel(1966a): *Les mots et les choses: une archéologie des sciences humaines*, Gallimard.
- (1966b): *La pensée du dehors*, dans ; Critique N° 229, juin 1966, Minuit. 523-546.
- Laporte, Roger(1966): *Le oui, le non, le neuter*, dans ; Critique N° 229, juin 1966, Minuit. 579-590.
- (1998): *A l'extrême pointe: Proust, Bataille, Blanchot*, P.O.L.
- Levinas, Emmanuel(1975) : *Sur Maurice Blanchot*, Fata Morgana.
- Nancy, Jean-Luc(1983): *La communauté désavouée*, Galilée.
- 石川 学 (2016) : 「文学と無力への意志：ジョルジュ・バタイユの第二次世界大戦以後の思索をめぐる」